



令和3年度
5月21日(木)
文貴 江口

今年度の主題研究がスタート。提案授業では研究主任の大山先生が授業をしました。昨年度の主題研究のテーマを引き継ぎつつも、さらによりよく子どもたちの力を高めるために、大山先生が練りに練った今年度の研究内容。それを具現化するための要素がてんこ盛りの授業となりました。

単元は「ふりこのきまり」、めあては「どうしたらふりこの1往復する時間が短くなるのだろう」でした。子どもたちが自ら問題を解決するために、主体的に、そして協働的に学び合い、考えを深める姿がとても印象的でした。私たちが今年度正に目指すべき子どもたちの姿が示された45分となりました。

刮目せよ！主体的・協働的に学ぶ姿～そして自覚化へ～

ICTの活用にもたけている大山先生ですが、結果の共有は板書で行いました。思考の深まりを見据えた上で、操作や書き加えのためにあえてとった手立てでした。明確な意図をもった手立ては大きな効果を発揮していたと言えます。

| 結果 | おもりの重さ | ふれ幅 | ふりこの長さ | 1往復の時間 |
|----|--------|-----|--------|--------|
| 1 | 60g | 30° | 20cm | 1.0 |
| 2 | 60g | 30° | 20cm | 0.9 |
| 3 | 60g | 30° | 20cm | 1.0 |
| 4 | 60g | 30° | 20cm | 1.0 |
| 5 | 60g | 10° | 20cm | 1.0 |
| 6 | 20g | 10° | 20cm | 0.9 |
| 7 | 20g | 30° | 20cm | 1.0 |
| 内田 | 10g | 30° | 20cm | 1.0 |
| 船室 | 10g | 20° | 20cm | 0.9 |



没頭し、共に高め合う姿

「没頭」をテーマにかかげた今回の主題研究ですが、提案授業の中では、正にそのような姿が見られました。予想を確かめるために実験を行う姿はもとより、実験結果から考えを深める場面でも、粘り強く問題や教材と向き合う子どもたちの姿がありました。主体的な学びを引き出すための手立ての1つとして「変化の要因を問う発問」がありましたが、それを起点に実験方法の見直しを考える子どもたちの姿は、最後までとぎれることなく問題解決に向かっていました。単に発問だけが功を奏したわけではなく、そこには前単元までの学びの積み重ねや、風土づくりが大きく作用していたことは、見た先生方全員に伝わっていたはずで

また、協働的に学ぶ子どもたちの姿も絶えず見られました。自ら他者の所へ向かい、意見を交換し、解決へ向かう姿は、大山先生の想定を超えた部分もあったそうです。手立てを講じるまでもなく協働へ向かう姿の裏には、これまでのどのような積み重ねがあったのでしょうか。

今年度の目玉、振り返りのあり方

前年度の研究の大きな課題は振り返りのあり方でした。提案授業の中ではポートフォリオという形で振り返りの形が示されています。今回の振り返りは①主体的な学びと協働的な学びのよさについて思い起こし、そのレベルに印をつける②友達とその要因について話し、自覚化する③内容を改めて自分の言葉で書く、という手順でした。授業内容の充実ぶりからわかるように、子どもたち自身も学び方のよさを実感していたのですが、要因についてはまだまだ表現できていないと、大山先生自身も振り返っていました。言葉かけ等、さらなるブラッシュアップが期待できそうです。

協議会にて

協議会では、「同じ土台に乗せることの難しさ」や「難易度の設定の難しさ」について意見が挙がりました。
・ 今回の授業内容は、実験方法を見直すという、一部の子どもたちにとっては、少し難易度の高い内容でした。起点となる子どもたちが話している内容に少なからずついていけない子がいたことを考えると、どのように全員を同じ土台に乗せるかも、今後は重要なテーマとなりそうです。難易度が低すぎると問題解決への意欲がそがれるため、実態をいかに見極めるか、その方法について探っていきます。

当日に向けて研究内容提案と授業実践を並行して進めていった大山先生。考えを深めることを誰よりも楽しんでいるからこそ成していることかもしれません。見事に提案授業者としての役目を果たし、学校のみならず、北九州を代表する理科の先生方にも授業の在り方を示しました。



5月21日(木) ロイロノート研修会！！
今年度より新しく導入されたロイロノートの使い方をICT担当(大山先生)が行います。昨日の授業者が今日の研修の主催って！？どうなってんの！？もはや変態です(褒め言葉)。